

総括報告

授業時間以外の学びの充実・発展についての教科集団幹事の 考え方、および「授業改善のためのアンケート」結果分析

教養教育実施委員会企画・運営委員会委員長

伊藤 正彦

はじめに

前年度のFD研究会の取り組みによって、授業時間以外の学習のあり方は多様であり、時間のみの問題ではないことが確認されている。本年度のテーマを「授業時間以外の学び」としたのは、こうした認識をふまえたものである。本来、授業時間以外の学びのあり方とそれを充実させる方法は、科目の性格や専門分野によって異なるものであり、教科集団別分科会での検討こそが重要である。本報告は、教科集団幹事への事前アンケートの結果と、2006年度後期・2007年度前期の「授業改善のためのアンケート」の結果を整理し、教科集団別分科会での検討の素材を提供することを目標としたい。

I 教科集団幹事への事前アンケートの結果から

7月に実施した教科集団幹事への事前アンケートの結果によって、授業時間以外の学びに関する教員側の認識を確認しよう（教科集団ではないものの、事前アンケートには学際科目、基礎セミナーからもご回答いただいた。ご協力くださった学際科目・基礎セミナー委員会委員長の本間里見氏に感謝申し上げます）。なお、末尾に【資料1】として折田充氏作成の『『教養教育に関するFD研究会2007』テーマに関する教科集団幹事への事前アンケート結果一覧』を掲載したので、事前アンケートの結果の詳細は、そちらを参照されたい。

【質問（1）学生に求める授業時間以外の適切な学びのあり方とは？】

各教科集団が担当する授業の授業時間以外の適切な学びのあり方として、教科集団幹事が挙げた回答は、次の3つに整理できる。

a. 毎週、決まった時間の予習・復習を求める教科集団

数学・統計学（専門基礎）、哲学、既修外国語、初修外国語

b. 試験前やレポート作成時に求める教科集団

数学・統計学、物理学、化学（専門基礎）、生物学、地学（専門基礎）、科学技術・情報、環境造形・科学、健康・スポーツ科学、医科学、薬科学、哲学、教育学、心理学、法学、政治学、経済学、社会学、芸術学、文学・言語学、地理学、歴史学、情報教育、学際科目、基礎セミナー

c. 授業に関連する文献の講読や実践活動を求める教科集団

生物学、地学、地学（専門基礎）、科学技術・情報、健康・スポーツ科学、医科学、薬科学（専門基礎）、哲学、教育学、心理学、法学、経済学、社会学、芸術学、文学・言語学、歴史学、既修外国語、初修外国語、学際科目、基礎セミナー

一見して明らかなように、毎週決まった時間の予習・復習が必要と考える科目は概ね外国語科目と専門基礎科目であり、それ以外の教養教育科目は試験前や課題を付与した際の学習、授業に関連した自主

的な学習・実践活動を求めるという認識であった。

【質問 (2) 授業時間以外の学生の学びの現状をどのように考えるか？】

授業時間以外の学生の学びの現状に関する各教科集団幹事の認識を、「どちらかといえば十分」以上と、「どちらかといえば不十分」以下の2つに区分すれば、次の通り。

a. 「どちらかといえば十分」以上と回答した教科集団

数学・統計学、化学、生物学（専門基礎）、地学、医科学、薬科学（専門基礎）、教育学、政治学、社会学、地理学、情報教育、基礎セミナー

b. 「どちらかといえば不十分」以下と回答した教科集団

数学・統計学（専門基礎）、物理学、生物学、地学（専門基礎）、科学技術・情報、環境造形・科学、健康・スポーツ科学、医科学、哲学、心理学、法学、経済学、芸術学、文学・言語学、歴史学、既修外国語、初修外国語、学際科目

「どちらかといえば不十分」以下の回答が半数以上を占めるものの、意外にも明確に「不十分である」との認識を示した教科集団は3つにとどまっている。

【質問 (3) 授業時間以外の学生の学びを充実・発展させるために取り組んでいることは？】

各教科集団が開講する授業では、授業時間以外の学生の学びを充実・発展させるためにさまざまな工夫や取り組みがなされている（教科集団としての組織的な取り組みではなく、個々の授業の取り組みも含む）が、その取り組みは、a. 中間試験や小テスト、レポート等の課題を付与するタイプ、b. 学生の学習意欲を増進するように授業内容の充実を図るタイプ、c. 学生の学習条件や学習支援を整備するタイプに大別できる。どのような取り組みが、どの教科集団の開講授業でなされているかを一覧に示せば、次の通り（教養教育科目と専門基礎科目とに区分して示す）。

教養教育科目の場合

a. 課題を付与するタイプ

中間試験の実施	初修外国語
レポート課題の付与	薬科学、教育学、社会学
小テストの実施	文学・言語学、初修外国語
毎回、レポート課題の付与	生物学
感想文の提出	科学技術・情報、社会学
発表・グループ発表の課題の付与	環境造形・科学、初修外国語

b. 授業内容の充実を図るタイプ

教材の工夫	法学、政治学、社会学
実験や野外巡検の導入	地学、学際科目
試合観戦の導入	健康・スポーツ科学
視覚教材の活用	科学技術・情報、社会学、歴史学

c. 学習条件・学習支援を整備するタイプ

HP や Web 上での資料提供	科学技術・情報、薬科学
参考文献の提示・解説	教育学、心理学、経済学、歴史学
能力判定テストの試行	既修外国語
e-learning を用いた学習支援	学際科目

専門基礎科目の場合

a. 課題を付与するタイプ

中間試験の実施	数学
レポート課題の付与	地学
小テストの実施	地学
毎回、レポート課題の付与	生物学
プレゼンテーションの課題の付与	薬科学

b. 授業内容の充実を図るタイプ

視覚教材の活用	地学
---------	----

c. 学習条件・学習支援を整備するタイプ

HP や Web での資料提供	地学
-----------------	----

【質問 (4) 授業時間以外の学生の学びをさらに充実・発展させるために考えられる方法とは？】

下に示す一覧の通り（【質問 (3)】と同様に、教養教育科目と専門基礎科目とに区分して示す）、各教科集団幹事が授業時間以外の学生の学びをさらに充実・発展させる方法として考えるものは、【質問 (3)】の場合と同様の3つのタイプに大別できるが、b. 自主的な学習意欲が増進するよう授業内容の充実を図る取り組みについては、身近な教材・話題の提供、視覚教材の活用、実験・巡検・見学の導入、実践・体感的要素の導入などが挙げられており、自然科学、人文社会科学、健康・スポーツ科学といった分野の違いを越えて、学生が授業内容を体感できる要素を導入することが有効であると認識されている。また特筆すべきこととして、c. 学習条件・学習支援を整備するタイプでは、学生自身が学習目標・計画を作成して教員が指導・アドバイスするという先駆的試みが既修外国語の中で構想されている。なお、教科集団や個々の授業担当教員の取り組みのほかに、単位認定の厳格化、カリキュラムの充実・体系化、教養部の復活といった組織的な取り組みの必要性も複数の教科集団幹事から指摘されている。

教養教育科目の場合

a. 課題を付与するタイプ

毎回、小テストの実施	物理学、科学技術・情報、環境・造形科学、初修外国語
小レポートの課題付与	物理学、科学技術・情報
発表・作品制作・レポートの課題付与	薬科学、社会学、芸術学
感想文の提出	科学技術・情報
不明な点を書かせる	物理学

b. 授業内容の充実を図るタイプ

授業に関連する話題の提供	教育学、政治学、学際科目
視覚教材の活用	化学、生物学、心理学、経済学、地理学
試合観戦・実践練習の導入	健康・スポーツ科学
裁判所・取引所等見学	法学
実験の導入	地学

c. 学習条件・学習支援を整備するタイプ

参考文献・指定文献の提示	地学、環境・造形科学、哲学、心理学、経済学、文学・言語学、地理学
--------------	----------------------------------

学習目標・計画の作成・提出	既修外国語
教員の指導の緊密化	既修外国語、薬科学
d. 組織的整備	
単位認定の厳格化	医科学、哲学
カリキュラムの充実・体系化	数学・統計学
教養部の復活	科学技術・情報
専門基礎科目の場合	
a. 課題を付与するタイプ	
前の授業のレジュメを作成させる	数学・統計学
小テストの実施	化学
b. 授業内容の充実を図るタイプ	
演習形式の導入	化学
授業と実験の連携を図る	生物学、地学
研究所・企業見学	薬科学

II「授業改善のためのアンケート」の結果から

前年度のFD研究会では、「授業改善のためのアンケート」の数値が従来よりも悪化しており、学生の評価の基準が厳しくなっているのではないかと、ということが問題の1つとして指摘された。2006年度後期と2007年度前期の場合はどうであったか、確認しておこう。なお、末尾に【資料2】として菅岡強司氏作成の『「授業改善のためのアンケート」集計一覧』を掲載したので、アンケート結果の全体は、そちらを参照されたい。

さしあたり、授業の全体的評価を示す【質問15 全体として、この授業はどの程度有意義でしたか?】の平均値を科目ごとにあげよう。

2006年度後期	自然科学系列	1.95	2007年度前期	自然科学系列	2.03
	専門基礎 I	2.13		専門基礎 I	2.22
	人文社会系列	1.89		人文社会系列	2.03
	既修外国語	1.96		既修外国語	1.95
	初修外国語	1.95		初修外国語	1.77
	健康・スポーツ	1.71		健康・スポーツ	1.35
	学際科目	1.75		学際科目	1.79
	基礎セミナー	1.85		基礎セミナー	1.78

(1.00に近いほど学生による評価が高い)

多くの科目で前年度の平均値を上回っており、これを見る限りは、前年度に指摘された傾向には歯止めがかかったように思われる。しかし、前年度指摘された傾向がどのように推移していくか、今後も注意深く見守り、再びそうした傾向が顕著になれば、詳細な分析が必要となろう。2004年度後期の「授業改善のためのアンケート」実施以来、教員側はFD研究会全体会・教科集団別分科会等において経験交流・意見交換し、またアンケート結果をもとに授業改善の努力を重ねてきており、決して怠慢を犯しているわけではない。にもかかわらず、アンケートの数値が悪化する傾向が見られたというのは皮肉な結果であり、学生側に“アンケート慣れ”の傾向、もしくは授業改善のレベルが上がれば上がるほ

ど学生の評価の眼が厳しくなる傾向があるのかもしれない。ともあれ、前年度指摘された傾向は、「授業改善のためのアンケート」の数値がけっして絶対化できない性格のものであることを示しており、「組織評価」等において活用する場合には、この点を十分に注意しなければならない。

さて、本学の教養教育において学生は授業時間以外の学びにどれくらい時間を費やしているのだろうか。「授業改善のためのアンケート」のうち、授業時間以外の学習時間に関する学生側の自己認識を示す【質問 11 この授業について 1 週あたり平均して、どの程度、授業時間外の学習（予習・復習、資料収集、文献講読、レポート作成など）をしましたか？】の平均値を見よう（科目ごとの平均値を示す）。

2006 年度後期	自然科学系列	4.03	2007 年度前期	自然科学系列	4.20
	専門基礎 I	3.62		専門基礎 I	3.51
	人文社会系列	4.30		人文社会系列	4.35
	既修外国語	3.53		既修外国語	3.44
	初修外国語	3.38		初修外国語	3.24
	健康・スポーツ	4.26		健康・スポーツ	4.52
	学際科目	4.16		学際科目	4.12
	基礎セミナー	3.97		基礎セミナー	3.82

(1.00 に近いほど学習時間が多い)

自然科学系列、人文社会系列、学際科目といった講義形式の授業、また健康スポーツ科学の授業では学習時間の平均が 30 分以下であるものの、外国語科目、専門基礎科目、課題を付与するタイプの授業である基礎セミナーでは多くの学生が 30 分以上 2 時間未満の学習を行なっている。アンケートの結果に基づく限りではあるが、この数値は本学の学生が教養教育において授業時間以外の学習を行っていないわけではなく、学生の生活実態に照らせば、十分に学習していることを示している。下に挙げる通り、熊本大学『2004 年学生生活実態調査報告書』（2005 年 6 月）によれば、就学にあたって、家からの経済的援助よりもアルバイト・奨学金に依存している本学の学生は 25% 近くにのぼっており（1 年生の場合は 25% を超える）、またアルバイトに費やす時間の平均は週 8 時間程度と見ることができる。これは 2004 年度のデータであり、その後、学生生活に占めるアルバイトの比重はさらに高まっていると予想される。仮に週 8 時間のアルバイト時間の存在を想定し、週に外国語科目を 4 つ、専門基礎科目を 4~6 つ程度履修して授業時間以外の学習を行なっていること、基礎セミナーや情報教育において課題が付与されていること、さらにサークル等の課外活動の存在を考えれば、本学の学生は目一杯の生活を送っているともできよう。

修学と家庭との負担度について

	学 年 別					上段 人数
	1年	2年	3年	4年	5・6年	下段 (%)
経済的援助のみで修学可能	131	124	140	129	35	559
	40.5	38.9	37.8	36.3	62.5	39.3
主に家からの経済的援助+アルバイトや奨学金	106	121	149	121	11	508
	32.7	38.1	40.3	34.1	19.6	35.7
主にアルバイトや奨学金+家からの経済的援助	59	52	56	78	8	253
	18.2	16.4	15.1	22.0	14.3	17.8
家からの経済的援助なし(アルバイトや奨学金のみ)	27	21	24	27	2	101
	8.3	6.6	6.5	7.6	3.6	7.1
無回答	1	—	1	—	—	2
	0.3	—	0.3	—	—	0.1
合計	324	318	370	355	56	1423
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(熊本大学『2004 年学生生活実態調査報告書』2005 年 6 月、10 頁より転載)

1 週間平均のアルバイト時間について

上段 人数
下段 (%)

	学 年 別					合 計
	1年	2年	3年	4年	5・6年	
4時間未満	46	62	72	76	19	275
	14.2	19.5	19.5	21.4	33.9	19.3
4時間～8時間未満	75	57	91	111	12	346
	23.1	17.9	24.5	31.2	21.4	24.4
8時間～12時間未満	36	37	47	49	5	174
	11.1	11.6	12.7	13.8	8.9	12.2
12時間～16時間未満	33	34	38	27	3	135
	10.2	10.7	10.3	7.6	5.4	9.5
16時間～20時間未満	35	39	38	24	2	138
	10.8	12.3	10.3	6.8	3.6	9.7
20時間～30時間未満	36	49	33	29	—	147
	11.1	15.4	8.9	8.2	—	10.3
30時間以上	7	8	8	7	1	31
	2.2	2.5	2.2	2.0	1.8	2.2
無回答	56	32	43	32	14	177
	17.3	10.1	11.6	9.0	25.0	12.4
合計	324	318	370	355	56	1423
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(同上書、17 頁より転載)

もちろん、質問 11 の回答は標準偏差が大きく、授業時間以外に学んでいる学生と学んでいない学生との格差が存在する。教科集団幹事が授業時間以外の学びが「不十分」と感じている大きな要因は、学生間の格差と学びのあり方 = 自発性の乏しさにあるのではないだろうか。

前節で見たように、教科集団幹事が授業時間以外の学生の学びを充実・発展させるために重視していたのは、いかにして授業内容の理解度を高め、授業内容に関心・問題意識を抱かせるかであった。この点に関わる「授業改善のためのアンケート」の質問 7、質問 13 の科目ごとの平均値を見よう。

【質問 7 教員は、授業をわかりやすくする工夫をしていましたか？】

2006 年度後期	自然科学系列	2.06	2007 年度前期	自然科学系列	2.09
	専門基礎 I	2.16		専門基礎 I	2.27
	人文社会系列	1.99		人文社会系列	2.11
	既修外国語	1.98		既修外国語	1.98
	初修外国語	2.01		初修外国語	1.90
	健康・スポーツ	1.94		健康・スポーツ	1.68
	学際科目	1.88		学際科目	1.96
	基礎セミナー	2.06		基礎セミナー	1.97

(1.00 に近いほど学生による評価が高い)

【質問 13 この授業の内容やその関連分野に対する関心や問題意識を、以前と比べてどの程度もつようになりましたか？】

2006 年度後期	自然科学系列	1.99	2007 年度前期	自然科学系列	2.03
	専門基礎 I	2.30		専門基礎 I	2.22
	人文社会系列	1.91		人文社会系列	2.01
	既修外国語	2.14		既修外国語	2.15
	初修外国語	2.00		初修外国語	1.90
	健康・スポーツ	1.90		健康・スポーツ	1.64
	学際科目	1.76		学際科目	1.81
	基礎セミナー	1.82		基礎セミナー	1.80

(1.00 に近いほど学生による評価が高い)

いずれの科目についても、「授業をわかりやすくする工夫」はかなり図られており、授業内容への関心・問題意識も喚起していると言ってよい値である。あえて言えば、専門基礎科目で「わかりやすくする工夫」について検討する必要があるのかもしれない。授業内容への関心・問題意識の喚起は、健康・スポーツ、学際科目、基礎セミナーなど現代的素材を扱った授業や実践的・体感的要素を含んだ授業において顕著であり、専門基礎科目や既修外国語など積み上げ式やスキルの要素を含む授業では低下する傾向がある。先に見たように、専門基礎科目や既修外国語は、学生が授業時間以外の学習に時間を費やしている授業であり、いわば学べば学ぶほど関心・問題意識が希薄になる傾向があるとも言える。これは必修科目の性格によるものでもあると思われるが、そうした科目では授業の意義の説明と学習の動機付けをこれまで以上に追求してみる必要があるだろう。

全体的に見て、教科集団幹事が「毎週、決まった時間の予習・復習を求める」と考える授業では多くの学生が授業時間以外に30分以上2時間未満の学習を行っており、教員側も「授業をわかりやすくする工夫」や授業内容への関心・問題意識の喚起に努めており、さらに個々の授業レベルでは授業時間以外の学生の学びを充実・発展させるための工夫もさまざまに行なわれている。これは、劣悪な教育研究条件にもかかわらず、FD研究会を中心に教員が授業改善に努力してきた成果に違いない。

課題は、学んでいる学生と学んでいない学生との格差をいかにして是正するか、また個々の授業のレベルを越えて教科集団としていかに組織的に整備するかであろう。取り組みや工夫が不十分な授業について改善を図ること、ならびに各教科集団が提供する授業の性格に応じていかなる工夫・方法が適切であるかを検討することが必要である。本日の全体会で村里・古賀両氏にお話いただく実践例、また後段に示す私見を参考にしながら、教科集団別分科会で各教科集団のあるべき取り組み方をご検討いただきたい。

結びに代えて——教養教育科目における適切な方法とは——

授業時間以外の学生の学びを充実・発展させるための方法としては、毎回の小テスト実施やレポート課題の付与が考えられるが、それをすべての授業で行なうことは、学生の負担、教員の負担から見て、また理想的な学びのあり方から見ても不適切であろう。先に見た本学の学生生活の実態からすれば、過度な課題付与は学生の自発的な学びの機会と可能性を奪うことにさえなりかねないからである。

教養教育科目（外国語、専門基礎、基礎セミナー、情報教育を除いた科目）に関する限り、毎回の小テスト実施やレポート課題の付与は必ずしも必要ない。仮に、毎週、学習を求めるとすれば、前回の授業の受講ノートを整理して前回の講義内容を確認する程度が適切であろう。教養教育科目における授業時間以外の学生の学びを充実・発展させるための方法としては、学生の自主的学習意欲を増進させるよう授業を充実することこそが重要である。小テストや感想文の提出を適宜（数回程度）行なって学生の理解度を確認すること、授業内容を体感しやすい要素（身近な教材、視覚教材の活用、実験・巡検・見学など）を取り入れるなどして学生の関心・学習意欲の向上を図ること、参考文献の提示・解説によって学習条件を整えること、これらの方法によって工夫するのが適切であろう。

また、レポートや発表課題を授業期間中に1つぐらい与えて学習機会を付与することも考えられるが、受講学生が多い授業では困難であり（行なえるのは受講学生数が20～30名ぐらいの授業まで）、またすべての教養教育科目で行なえば学生の加重負担となってしまう。レポートや発表課題の付与は、個々の授業担当教員の判断に任せている現行のあり方が適切と思われる。

なお、教員側の負担を軽減しながら、学生の理解度を確認し、学生の学習意欲の向上も図る方法として、マーク・シートによる小テストの実施という方法も行なわれている。この実践例を全体会の最後に学際科目担当の長谷中利昭氏に紹介していただくので、是非こちらも参考にされたい。

[付 記] 本報告の準備にあたっては、企画・運営委員会 FD 研究会部会の折田充・菅岡強司・戸田敬の三氏、事前打ち合わせ会に参加された古賀倫嗣・村里泰昭両氏、学務部教務課の河津秀利氏に多くのご協力をいただいた。末筆ではあるが、記して感謝申し上げます。

【資料 1】

「教養教育に関するFD研究会2007」テーマに関する教科集団幹事への事前アンケート結果一覧

(作成：折田 充)

	教科集団名		* (1) 授業時間以外の 学生の学びに 求めること	** (2) 授業時間以外 の学生の学び は十分か	*** (3) 授業時間以外の学生の学びを 充実・発展させるために 取り組んでいること	**** (4) 授業時間以外の学生の学びを 充実・発展させるために 考えうる方法
1	数学・ 統計学	教養科目	②	②	記載なし。	個々の科目に関しては、適切なレポートを課すことで対応できると思います。現在の教養教育では、科目全体の設計が存在しません。学生の学びを充実させるためには、現行のようなアラカルトの料理を並べる形ではなく、しっかりとしたメニューを学生に提示して、科目間の連携も図り、学生が意義を感じながら学べるような設計をすることが必要と考えます。
		専門基礎科目	①②⑦	③	中間試験を行う。これは非常に効果があります。	専門科目の方で実施している工夫ですが、毎回の講義のあと、次の講義までの間にその講義のレジュメを書かせると、講義内容の定着がはかれ、学生にも役立ったと評価されています。
2	物理学		②③	③	<p>1) 高校での授業の受け方と大学での講義の受け方は違うという事をしっかり伝える。高校では与えられたものを消化する、または覚える教育である。が、大学では自分で学ぶ内容を探し、自分で調査、研究する事が基本である。教材はその切っ掛けとして利用し、講義の内容に関連した問題点を自ら探し、追求する訓練をする事を伝える(例：各テーマに関連した物理現象を探し、レポートにまとめて提出させる)。</p> <p>2) 授業内容を難解にしない。</p> <p>3) 到達度別クラスに分ける(高校で履修しているグループと未履修のグループに分ける)。</p>	<p>教養としての講義なので、それほど時間を掛ける必要は無いのではなかろうか。しかし、講義での話を聞いただけで身に付くものではなく、やはり、予習復習に対応する時間外での勉強は必要である。ところで、理学の中でも物理学は基本であるから、例えば、</p> <p>1) 色々な現象が何故起きるか、常に根本を考える癖をつけてもらう(例：講義の内容で分かったところでなく、分からなかった所や怪しいところのみを書けと言う事を毎回書かせている講義もある)。物理では分からないところというところとブラックホールに関する質問が多いので、身近な出来事に注目して見てみるようにと忠告している。</p> <p>2) 基本的で簡単に解答ができるような問題を出す(例：講義の最後の時間にだし、次回に出席確認と同時に解答を提出させる。それを見て問題を解くときの考え方と解答例を示す。ただし、聴講人数が多くなると評価して返すことは不可能となる)。</p> <p>3) TVなどの記事における「にせ科学の記事」を探し、考察しレポートとして提出させる。つまり、常に科学的に考察する訓練を付けさせる(例：念じたら空中浮遊ができるという人がいるという記事があったが、これをどう思うかなど)。</p>
3	化学	主題科目	⑤	②	記載なし。	日頃の生活の中で、講義に関連する項目を見出し、科学的な現象や性質を身をもって理解するよう指導する。
		専門基礎科目	②	②	記載なし。	定期的に演習や小テストを行って、意識的に学習の機会を増やすようにする。

		基礎セミナー	③④	②	調査や調査内容の発表準備を各自授業時間外に要求する。	基礎セミナーで培ったことを、他の通常の学習に生かすように指導する。また、通常の講義においても基礎セミナーで習得したことを積極的に利用するような講義形態を取り入れれば相乗効果が期待されるのではないか。
4	生物学	教養教育課目	②④	③	毎回、授業や実験に関するレポート課題を出す（生物教科集団として特別に取り組んでいることはない）。	授業内容に関連した最近の生物学に関する話題を数多く提供し、学生の生物学に対する興味を高めさせる。
		専門基礎科目	②④	②	毎回授業内容に関するレポート課題を出す。 授業内容に関して興味のある点を詳しく調べさせ、学生自身にプレゼンテーションさせる。 実験科目において、レポート作成を通じて学びを発展させる。	授業内容と実験内容のある程度をリンクさせ、「習ったこと」と「自分自身が行ったこと」の両面から学生の学びを充実・発展させる。
5	地学	主題科目、学際科目等、教養教育の科目	④⑤⑥	②	専門基礎科目の場合と同様に、興味を持ってもらうことが大切である。実験や野外巡検を取り入れ、講義にも最新のトピックスをまじえるなどしている。ビデオを用いた授業も行っている。	専門基礎科目の場合と同様である。
		専門基礎科目	②④⑤	③	地球科学の様々な概念を理解してもらうには、視覚に頼るところが大きい。専門基礎科目「地学I」「地学II」では、わかりやすいカラー図版を多く用いたテキストを採用し、講義も、テキストその他から図を引用したパワーポイントのスライドで行っている。パワーポイントのスライドやテキストのまとめは、予習や復習に利用してもらうようホームページなどで公開している。WebCTを用いて小テストやレポート提出をさせている教員もいる。	地球科学は高校で学習していない学生が多く、馴染みが無いために敬遠されがちである。授業時間外の自発的な学習を促すには、まず、学生に興味を持ってもらうことが大事である。その目的で映画や科学番組を利用するのも一つの方法であり、一部の教官が授業時間外にボランティアで学生対象の上映会を開いている。また、授業中に参考となる書物を紹介して読むように薦める。 ただ話を聴いたり読んだりするだけでなく、身をもって学んでもらうために学生実験は特に重要である。科学的に意義深くかつ面白い学生実験となるようにテーマを吟味し、実験の意義をきちんと理解してもらえば、時間をかけて自分で文献を調べ、優れたレポートを作成する学生の数も増えるであろう。
6	科学技術・情報	②③④⑦ (毎回WebCTに感想を書かせているので若干の復習にはなっている)	③④	WebCTに感想を書かせている。これは授業の双方向性の充実にもなっている。 暮らしと科学技術Dを担当しているが、全学部全学科が対象となっている。講義の内容は化学をベースしており、文系学生にも判り易いように図表を多くしたパワーポイントのスライドを用いて講義をしている。学生がスライドの図表を講義時間に筆写することは困難であるので、使用した講義のスライドは、講義の中間時点と最終時点の2回にわけてすべてPDFファイルとして受講者に配付している。 毎回WebCTに感想を書かせている。これは授業の双方向性の充実にもなっている。	毎回感想を書かせたり、必要なら毎回小テストを行うことが有効だと思う。教養科目では小テストまでは必要ないと判断しているので、毎回の感想文のみを実施している。 アップデートな課題のレポートを課す。 教養教育は教養部の廃止以前が充実していたと思える。例えば工学部を例にあげると昭和40年代には、数学、物理学、化学、図学が必修であり高校での復習と専門への入門としての勉強ができた。また、人文科学系、社会科学系に興味ある科目を選択して通年で習い、心理学、哲学、文学などについてまとまった勉強ができた。教養部廃止後は、2単位でオムニバスの講義が増えている。可能ならば教養部を復活させ、高校の復習と専門への入門教育を復活させる時期ではなからうか（私見ですが、私は教養部廃止には反対でした）。	

					1回の講義毎に命題を出しているが、Web等から種々の参考文献を引いてきた参考文献の写しが非常に多く、自分の考えがレポートに記述できていないものが多い。これをなくすために、今回は何か一つの命題について調べさせるようにしたい。
7	環境造形・科学	②	③	授業内容に関連した調査課題を与えて、調査結果をグループ毎に発表させることで、授業時間以外での自己学習時間の確保させるようにしている。	指定図書を読ませる。 定期試験だけでなく、ミニテストを頻繁に行う。
8	健康・スポーツ科学	②④⑤	③	健スポの実技種目関連では、選択種目についてのゲーム・試合を観戦する。	健スポの実技種目関連では、選択種目についてのゲーム・試合を観戦する。あるいは、実際に自分で練習したり、上級者に教えてもらうなどの方法がある。
9	医科学	②③	科目によって ①あるいは④	工夫している先生もおられるかもしれないが、把握しておらず。	開講する科目の面白さと大切さを伝えた後は、単位認定を厳しくする。
10	薬科学	教養教育課目	②⑦ (やる気になること、好きになることが重要。好きになると勉強します。)	②③ WebCT上に授業で使用した資料(PowerPoint file)をアップロードしており、学生が復習しやすいように配慮した。種々の資料の持ち込み不可、再試験なしの定期試験を課しており、学生の学習意欲は高いと考えられる。双方向の授業ということで、レポート課題を出し、その答案について教員が解説を加えたり、答えたりした。	課題を与え、発表またはレポートの提出を随時とめる。 教員のところで実際に疑問などについて話し(学生が外向き)、コーチングを受ける。教員は、学生が来れるような時間帯を作る。
		専門基礎科目	④	② 特に、プレゼンテーションを強化することを徹底し、指導しています。授業時間以外においても様々な見聞を生かすよう心がけてくれていると思います。	近郊の研究所や企業の見学は、やはり効果が大きいと思います。
11	哲学	①②④	④	記載なし。	成績評価を厳しくする。 参考文献を挙げて、積極的に参照するよう指示する。
12	教育学	②③④⑤	②	教科集団として、特にとりくんでいる方策はない。個別の取り組みとしては、小レポートの提出を求める。参考文献を事前に紹介しておく。文献の紹介にあたっては、その文献の内容がわかるような紹介文・キャッチコピーを添えておく。	授業の充実。授業時間以外でも学びを発展させるための動機づけが不可欠であるから。それは、授業を通してしか喚起できないから。
13	心理学	②④	③	教養科目授業ではありませんが、授業参考文献リストを配布したり、授業時に文献を紹介するなど、授業時間以外の読書活動を促進する取り組みを行っています。	「心理学」は高校までの課程に存在しない授業科目であり、通常の学習と同じ意味での予習・復習は成り立ちにくいと考えます。下手に学生に委ねるならば、学生自身のもつ素朴な心理学イメージにとらわれ、「俗流心理学」に毒されてしまうという事態も生じるとも思われます。 教養課程においては、 ・適切な入門的心理学文献の紹介につとめる ・新聞記事やテレビ番組等、日常生活において遭遇するさまざまな事象を、心理学的観点から批判的に捉えなおせるようにつとめる などの、素朴で地道な取り組みを実施すれば、それで十分ではないかと愚考いたします。

14	法 学	②④⑤	③	<p>新聞記事・コラム等身近に関心を引きそうな教材を使用し、続きを探して読む・関連記事を追跡するなどの行動を促す。</p>	<p>教材用に作成されたものではない教材、特に視聴覚系のもの（映画・ドラマ・ドキュメンタリー等のビデオ等）を利用し、学生の関心を実社会に向けてる。</p> <p>裁判所・取引所等への見学会を開催する。</p>
15	政治学	③	②	<p>一般教の政治学の場合、高度な政治知識というよりも、メディアリテラシー的な能力が求められることから、講義時間内で時事問題を積極的に取り上げている。</p>	<p>学生（特に理系）に、どのように政治現象への関心をもってもらうかという観点から授業方式を改善することが重要だと思われる。</p>
16	経済学	②④	③	<p>教科集団としての取り組みは特にありません。幹事の私が開講している科目に関しては、講義で取り上げた参考文献を提示し、できる範囲で図書館などで原書に触れるよう紹介している程度です。</p> <p>この他にも担当スタッフの先生から「本学の学生はレポート等はまめに書いてきますし、特に1年次は学部にかかわらず、強く指示されたことは確実にやってくるように思います。そこで、参考資料等の探し方はできるだけ詳しく説明した上で、具体的に分量を決めて(A4用紙で〇ページ分)、次回の授業に向けて課題を出せば、少人数教育（基礎セミナーなど）においてはほぼやってくるようです」との意見もいただきました。</p>	<p>本学には経済学部がないこともありますが、経済関連のマスコミ報道などを授業でも積極的に取り上げ、身近な経済問題に親しむよう、新聞や関連図書を読む習慣を促すことを考えています。</p>
17	社会学	②③④⑤	②	<p>まず、視覚教材使用の合理化をはかり、単に見せるのではなく、背景紹介などを通じて深い内容理解の達成に工夫した。そして、配布資料の選別に力をいれ、新聞記事の配布などを通じて今日的な社会事象に対する受講生の関心を高めた。さらに、受講生の感想文やレポートに対するコメントをより丁寧にするなどを通じて、対面的な関係の構築をはかった。</p>	<p>授業内容は単なる抽象的な知識ではなく、それがいかに受講者たちの個々の問題関心に深く接続しているかを考えさせるため、例えば新聞、雑誌、テレビなどマスメディアによる情報伝達の内容やその仕方に対する自分なりの批判的な見方の形成を、授業以外の時間を活用して短いレポートを書かせることなどを通じて、促していくべきである。</p>
18	芸術	②④⑤	②	<p>文献の紹介。視聴覚教材の貸し出し。単元毎の小テスト。</p>	<p>予習復習の意義と重要性を繰り返し伝える。教員経験を実体験をふまえて話す。作品制作やレポートを課し提出させる。等</p>
19	文学・言語学	③④	③	<p>授業終了時に授業についての質問・感想を書かせたり、小テストを行ったりして、授業改善の一助とし、また次週の授業初めに教師からのコメントを行って、双方向性の確保に心がけている。</p>	<p>教科集団の教員全員の討論に基づき、学生に読ませたい選書リストを作成・配布し、授業の補足・発展に利用する方法が考えられる。</p>
20	地理学	③	②	<p>開講科目の担当教員に任せていますので、教科集団として、組織的に何かを取り組む試みは実施しておりません。</p>	<p>地理学の講義は、特定の地域の自然および人文社会現象について説明し、その地域に関心を持たせることを目的としています。したがって、教員は講義で扱った地域およびその地域で見られる特定事象に関してより深く調べてみたいと思わせるような情報（たとえば、書籍、論文、Webページ）を講義で提供するようにしなければならぬと考えます。</p>

21	歴史学	①④⑤	③	<p>前年度のFD分科会で、授業内容の参考文献・関連文献・映像等をこれまで以上に豊富に提示することを確認しており、担当教員がその方針で実践していることと思います。この点は、今年度のFD分科会で確認したいと思います。</p>	<p>授業の際、課題図書を指定し、それを読んだレポート作成を成績評価の中に組み込むことが考えられます。しかし、これは過去の取り組みの例からすると、学生に多大な負担を強いることとなり、専門基礎科目であれば可能でも、教養教育科目の負担としては避けたい方法です。授業内容の参考文献・関連文献・映像等を豊富に提示しながら、学生が関連するものを読んでみよう、観てみようとするように授業を魅力的に構成するように努めるしかないのではないかと思います。</p>
22	既修外国語	①④⑤	③	<p>昨年度に、当教科集団独自の取り組みとして「学習指導の改善のための授業担当者アンケート」が実施され、分科会での検討資料として配布されたが、学習指導に関する現状認識（授業時間以外の学習の充実を含む）が共有され、その後の個々の教員の授業改善に活かされてきていると考えられる。今後もこのような授業実践の交流が期待される。</p> <p>昨年度において、客観的な能力判定テストの試行が学習時間の向上に一定の効果があることが確認され、今年度は引き続き、より効果的な自己学習につながる能力判定テストについて検討しているところである</p>	<p>授業の初期段階で、学生は、これまでの学習を振り返るとともに、授業時間以外での学習を含めた学習目標・計画を作成・提出する。また、学生は、定期的に学習計画の進捗状況を自己チェックするとともに、教員と学生が学習計画、進捗状況について、話し合う機会を設ける（教員は学生に対して必要に応じて適宜アドバイス、指導を行う）。</p> <p>他の授業科目で求められる授業時間以外での学習に要する時間との関係も考慮した学習計画を立てさせる（学習時間を実際に確保できる学習計画の作成と実施が求められる）。</p> <p>授業時間以外での学習への意欲・動機付けを高めるための方策を、具体的に検討する（学習計画が学生自身の経験、学習スタイル、能力、興味、関心、目標等にできるだけ関連性があることが、意欲の向上に求められるであろう）。</p> <p>客観的な能力判定テストの結果に基づく学習計画の作成と実施が必要であると考えられる。</p> <p>教員が設定する授業目標と学生の学習計画との関係を、授業の初期段階において検討する。</p> <p>学生の授業内容への関心・満足度を高めることにより、授業時間以外での学習への意欲も向上させることができるのではないかと考えられる。</p> <p>教員間において、引き続き、授業時間以外の学生の学びを充実・発展させるための情報・意見交換が求められる。</p> <p>より精度の高い授業時間以外での学習時間の把握（経年変化を含む）が必要であると考えられる。</p>
23	初修外国語	①⑤	③	<p>教科集団全体として決定した取り組みはないが、教員個々の工夫として、定期試験以外の中間試験の実施、教科書本文の(一部の)暗唱や受講者ペアを作った会話の発表、暗唱した例文や会話・動詞活用形の小テストの随時実施等が挙げられる。</p>	<p>上記（3）の既の実施中の取り組みとして回答したことに含まれるが、自宅でCD等を聞いてこないと解答できない練習問題・小テスト等を毎回(のように)行い、その結果を成績評価の一部とする等が考えられる。</p>
24	情報教育	②	①	<p>情報基礎A、情報基礎B、情報処理概論のいずれの科目においても、学習目標を明確にしており、授業時間以外のいつでも、学外からでもオンラインコンテンツを閲覧したり、各項目のセルフ</p>	<p>情報基礎A、情報基礎Bについては、演習科目であるため、授業時間以外での学習を充実させる必要は感じていません。</p> <p>情報処理概論については、セルフ</p>

				ルフチェックテストを何度も受けることができるようにしてあります。どの学生がどの程度それらのコンテンツで学習したかの記録も保存されています。	フチェックテストの提示の仕方、内容構成をさらに工夫して、意欲的な学習を促進することが考えられます。
25	学際科目	②⑤	③	<p>授業テーマに関連する時間外学習が包括された多様な授業が見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアや市民活動、スポーツ活動、博物館見学など社会活動 ・e-learningを用いた授業時間外の学習支援 ・制作実習(授業時間外にも作業する) <p>一方で、学際科目はオムニバス形式で実施するため、学生は次回の授業内容が想定できず、予習がしにくいといった意見や異なる教員から同じ内容の講義を受けることがあるといった意見が出ている。学際科目担当者間で、授業方法や課題設定に関して情報共有していくことが重要だと考え、部局別FDを実施している。</p>	学際科目では、現行でも授業時間外学習(活動)を含めた授業が見られるが、一方でオムニバス形式の弊害も現れている。部局別FDにより授業内容を見直し、講義と授業時間外学習をうまく組み合わせた授業計画を検討したい。
26	基礎セミナー	②④⑤	②	<p>基礎セミナーの授業テーマは多様であり、個々の授業における課題等を正確に把握することは難しいが、多くの授業が調査報告を軸に展開しており、授業時間外の学習は必然と考える。グループ活動をさせる場合も多く見られ、授業時間外においても学生達が共同作業をしていることも考えられる。</p>	<p>基礎セミナーの学習目的の一つに自己の学習設計能力の涵養が挙げられている。その意味では授業時間外の学習態度を身につけることこそが基礎セミナーの学習テーマであり、各授業において、学習の多様な考え方(予習・復習の学習方法も含めて)を指導しているものとする。とりわけ、課題設定が授業時間外学習の質と量に大きく影響すると思われる。例えば、インターネットや文献等による調査にとどまらず、フィールドワーク的な課題を課すことで、総合的で自主的な学習をさせている授業も見受けられる。また、個々の授業の内容について、担当教員同士が意見交換できるよう部局別懇話会を開催している。</p>

註)4つのアンケート項目は下記の通り。

* (1) 貴教科集団が開講する教養教育の科目における授業時間以外の学生の学びについてどのようにお考えですか。次の①～⑦のいずれかを選んでください(複数回答可)。なお、⑦その他を選ばれた場合は、()内にその内容をお書きください。

学生に、

- ① 毎週、決まった時間を予習や復習に求める
- ② レポート作成時などに随時相応の時間を費やすことを求める
- ③ 学期末の定期試験前の試験勉強やレポート作成のためにのみ相応の時間を費やすことを求める
- ④ 授業内容に関連する文献などを読んだり調べたりすることを求める
- ⑤ 授業に関連した実践活動(博物館へ行く、映画を観る、スポーツをする/観る、音楽を鑑賞するなど)を行うことを求める
- ⑥ 特に授業時間以外の学びを求めない
- ⑦ その他 ()

** (2) 授業時間以外の学生の学びの実態についてどのようにお考えですか。次の①～④のいずれかを選んでください。

現在の授業時間以外の学生の学びは、

- ① 十分である
- ② どちらとも言えれば十分である
- ③ どちらかとも言えれば不十分である
- ④ 不十分である

*** (3) 前年度のFD研究会分科会での検討などを踏まえて、開講する授業科目の授業時間以外の学生の学びを充実・発展させるために、貴教科集団の教養科目の授業においてすでに実践に移している工夫や取り組みがあれば教えてください。教科集団としての取り組み、あるいは開講する科目の個別的な取り組みのいずれでも結構です。

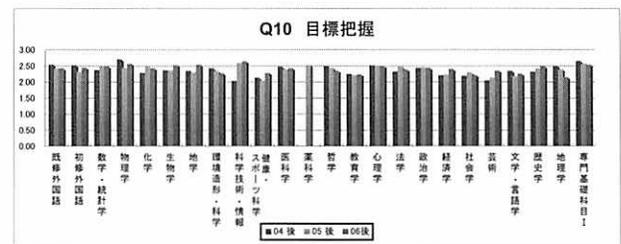
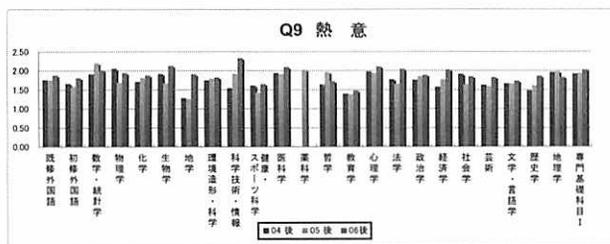
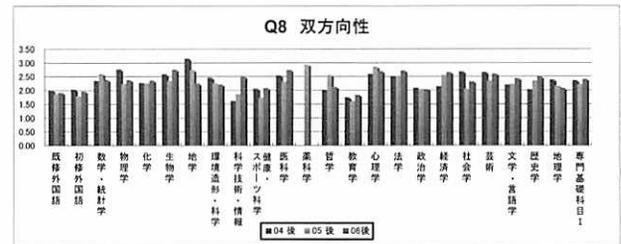
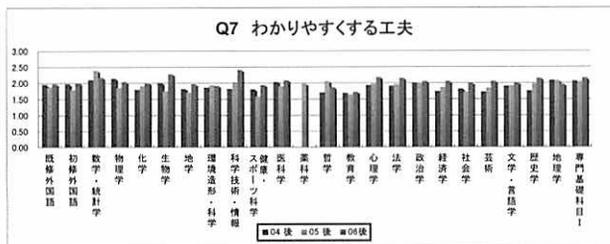
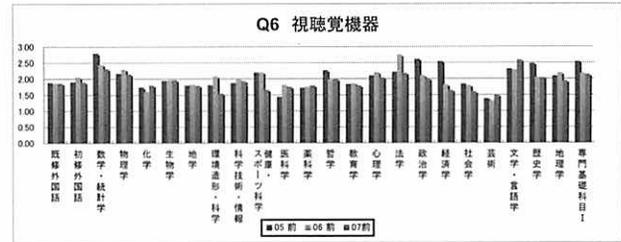
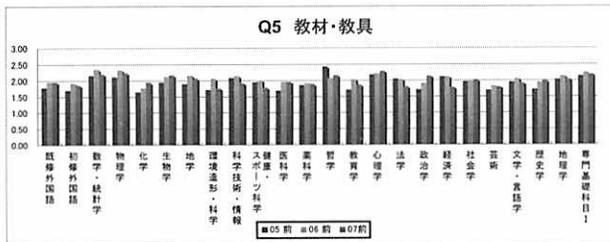
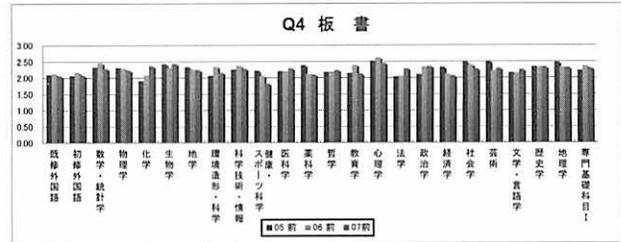
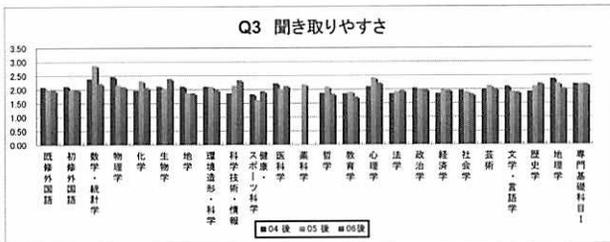
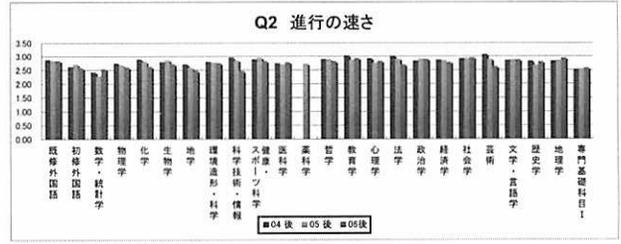
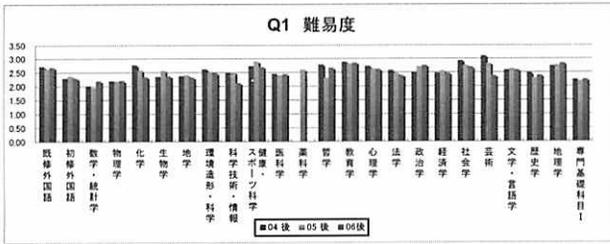
**** (4) 貴教科集団が開講する授業科目の授業時間以外の学生の学びを充実・発展させるために、どのような方法がありうると考えますか。必ず1点以上お書きください。

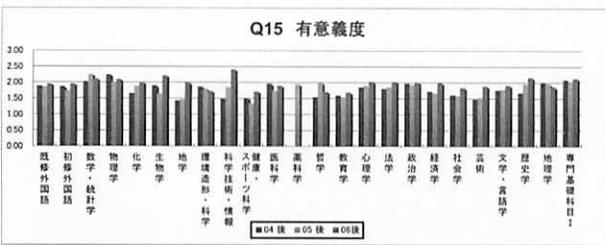
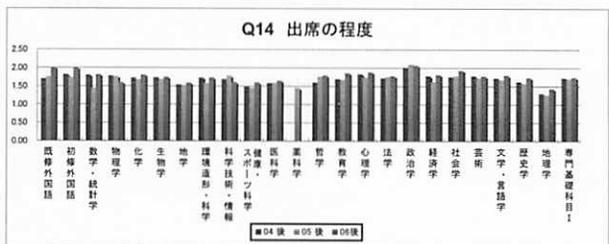
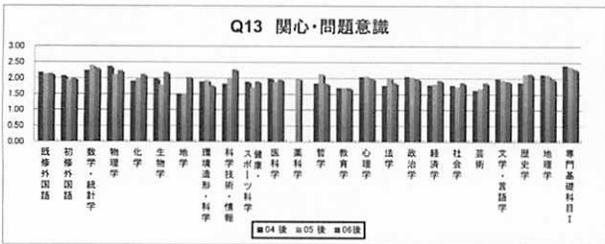
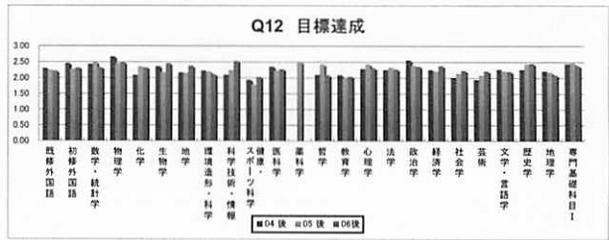
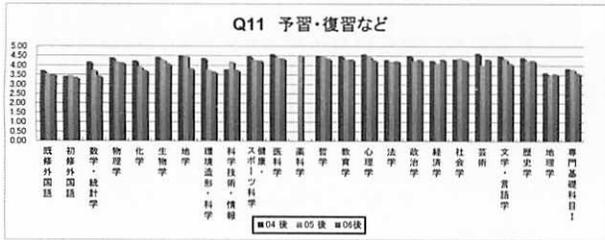
【資料 2】

「授業改善のためのアンケート」集計一覧

2004～2006年度後学期分

(作成：菅岡 強司)





2005～2007年度前学期分

